

2026 年 12 月期 第1四半期決算説明会 質疑応答の要約

開催日: 2026 年5月 18 日

登壇者: 取締役、専務執行役員、最高財務責任者 浅井 健

資料: <https://pdf.irpocket.com/C4631/WUpy/BbnY/IRfV.pdf>

Q: 第1四半期において前倒し需要の影響はどの程度あったか。

A: 前倒し需要は主にアジアを中心に、パッケージング & グラフィックやファンクショナルプロダクツの一部製品で見られた。ファンクショナルプロダクツのうち、ケミトロニクスの増収は実需の増加によるものが中心だった。カラー & ディスプレイや米州・欧州での影響は限定的だった。全体としては、前倒し需要によって3月の売上高が計画比で7～8%程度上振れしたと見ており、4月も一部で同様の傾向が続いている。

Q: 原料価格の上昇に対して、製品価格への転嫁はどの程度迅速に行われているか。ケミトロニクス製品の価格転嫁の見通しはどうか。

A: 今回の急激な原材料価格の上昇を受け、当社および競合各社ともに従来よりも迅速に製品価格への転嫁を進めている。ケミトロニクス製品についても需要が強いため、必要に応じてタイムリーな価格転嫁が可能と見ている。

Q: インキ使用量の削減の動きがあるが、出荷への影響はあるか。

A: 国内ではインキの使用量を削減するという動きが一部に見られるものの、海外ではそのような動きは今のところ見られていない。現時点では業績への大きな影響はない。

Q: ファンクショナルプロダクツ、特にケミトロニクスの営業利益率が上昇しているが、一時的なものか。今後も維持できるのか。

A: ケミトロニクスは需要が堅調で、前倒し出荷ではなく実需に支えられている。この出荷水準は今後も継続すると見込んでおり、現在の水準を当面維持できていると考えている。

Q: UV 硬化樹脂の売上が大きく伸びているが、理由は何か。

A: UV 硬化樹脂は、ディスプレイ用途に加え、半導体関連のソルダーレジスト用途が好調である。

Q: 顔料事業の需要や顧客在庫の状況はどうか。また、プラスチック向けのシェア拡大の背景は何か。

A: 顔料事業は、現時点ではディスプレイ用途以外の需要回復は限定的で、顧客在庫にも大きな変化は見られていない。ただし、ディスプレイ用途は第2四半期以降の需要回復が見込まれている。また、プラスチック向けは北米で競合企業の生産縮小によりシェア拡大が進んでおり、今後の増収要因として見込んでいる。事業全体としては、数量拡大から高付加価値製品へのシフトを進め、収益性の向上を目指している。

Q: カラー & ディスプレイにおける日本の営業利益率の低下の要因と、今後の回復見通しはどうか。

A: 第1四半期はインキ用・プラスチック用・デジタル用途の売上が前年より伸び悩み、収益性が低下した。一方で主力のディスプレイ用顔料は1～2月は低調だったが、3月から回復基調に入り、4月以降も改善が続いている。このため第2四半期以降は売上・利益ともに回復し、当初見通しに近い水準まで戻る見込みとなっている。

Q: ファンクショナルプロダクツにおけるケミトロニクス以外の増益要因は何か。また今後の見通しはどうか。

A: 増益は主にコーティング用樹脂と PPS コンパウンドが好調だったことによる。PPS コンパウンドは自動車や住宅設備向けで出荷が好調に推移しており、コーティング用樹脂もアジア

を中心に売上が増加した。第2四半期も好調な出荷が継続すると見込まれるが、コーティング用樹脂は前倒し需要の影響も含まれるため、下期の動向には注意していく。